

『臨床日記』（みすず書房、2000年11月、シャーンドル・フェレンツィ著・森 茂起翻訳）

文学部教授 森 茂 起

最近、村上春樹・柴田元幸著『翻訳夜話』（文春新書）という本を読んだ。いくつか翻訳を手がけてきた私にはすこぶる面白い本だったのだが、そのなかで村上春樹が面白いことを言っている。「自分がかけがえのある人間かどうか」と問いかけたとき、小説を書く自分はかけがえが「ある」が、翻訳をしているときには「自分がかけがえがないと感じる」というのである。これを読んだとき、私は、『臨床日記』を訳しているときの体験にひどく符合するのを感じて興奮を覚えた。自分がいちばん上手に訳せるというようなおこがましいことはどうもいえないが、自分が訳すようには誰も訳せない、という感情が起こるのである。フェレンツィという著者がいて、私とフェレンツィの出会いがあり、日本の読者にその著作を紹介する機会を与えられるという、村上春樹の言葉を借用すれば「三位一体」の関係のなかで起こる主観的な思いである。

私の場合、この感情は、今まで携わってきたいくつかの仕事の縁がより合わさって生まれたように思う。私は、大学院生のころにその著作に触れて以来、バリントという精神分析家に魅了され、結局、本学の中井久夫先生に協力するかたちで、2冊の著書の翻訳に携わることができた。そのバリントの師匠に当たるのがフェレンツィであり、バリントへの関心の延長上にフェレンツィが見えてきたのは自然の成り行きであった。これが一つの縁である。

次に、私は、甲南大学に赴任して間もないころより、児童養護施設という現場での心理臨床に携わり、今日まで続けてきた。偶然依頼されたことから始まった仕事なのだが、非常にやりがいを感じ、自分なりに一生懸命やってきたつもりである。ところが、最近の児童虐待の深刻化と「心的外傷（トラウマ）」への関心とともに、この分野がにわかに注目されるようになってきた。そして、この虐待と心的外傷の問題に命を賭けて取り組んだ人こそフェレンツィであり、その苦闘のあとを記録したのがこの『臨床日記』なのである。心的外傷の問題は、阪神・淡路大震災という災難まで重なって、運命に導かれるように、私の仕事の中心を占めるようになってしまった。

だから『臨床日記』という著作は、それぞれ別の理由で始まった私の仕事がすべて関係している結び目のような存在なのである。今から思えば、私自身が気づいていなかった私の心の深い部分に関わる問題が、それぞれの領域への関心を生んでいたのだろう。

加えて、フェレンツィという人物とこの著作の特殊性も、特別な感情を抱く一つの原因となっている。フェレンツィは、精神分析に関心があって、フロイトの生涯や、精神分析学史に少しでも触れたことのある人なら誰でも知っている重要な精神分析家である。それなのに、彼の本は今までまったく日本語に翻訳されてこなかった。その理由を一言で言えば、フェレンツィが晩年に精神分析学の「異端児」となり、死後に意図的に忘却されたことによる。本書は、そのフェレンツィの死の前年に書かれたものだが、「日記」といっても、最晩年の理論と実践を伝えるために書き留められた、彼の主著といってさしつかえない重要な著作である。それが意図的忘却によって長く日の目を見ず、執筆から50年以上たった1985年になってやっと出版されたのである。

そのようないわくつきの問題作で、しかも私の仕事と深くかわり、実際、内容は一読して興奮を抑えられないような興味深い記述に満ちている。これからも翻訳の仕事はすると思うが、これほどいろいろな条件の揃った著作にはおそらくもう二度と出会えないだろうと思う。私自身をかけがえなしと感じさせてくれた、私にとってかけがえのない著作、それがこの『臨床日記』である。